ウィズコロナ時代の中小企業経営

歴史に学ぶ

第四十五回 日本茶を世界に広めた幕末の女性実業家・大浦慶（おおうらけい）

大阪経済大学特別招聘教授・経済評論家 岡田 晃

今、インバウンドの増加など世界中で日本人気が高まっている。その影響で日本茶の輸出は年々増加し、金額・量ともに過去最高記録を更新中だ。

その日本茶輸出のパイオニアが、本稿の主人公・大浦慶である。

お茶の輸出で成功、巨万の富を築く グローバルな視野で先見性を発揮

慶は一八二八年、長崎の油商・大浦屋の一人娘として生まれた。大浦屋は江戸時代初期から約二百年続く有力な商家だったが、すでに経営が傾き始めていた。それに追い討ちをかけたのが、一八四三年に起きた長崎の大火で、大浦屋は店も住まいも失ってしまった。慶は十六歳だった。

そこから大浦屋再建に向けての奔走が始まる。

翌年、慶は婿養子を迎えた。ところがこの婿は商人の才覚がないと気に入らなかったらしく、祝言の翌日に追い出してしまったという。ここに、彼女の意志の強さと行動力の片鱗が見える。

父も亡くなり、大浦屋の女主人となった慶は、再建には新しい商売が必要と考えるようになった。

その頃、長崎に入港した外国船に潜り込んで上海に密航したとの〝伝説〟も残っている。信憑性は薄いようだが、当時はまだ鎖国中で海外渡航は重罪だった日本で、そんな行動をとったとすれば、大胆この上ない。

この逸話に表れているように、新しい商売のタネを探していた慶は海外にも目を向けていたのだろう。「欧米ではお茶へのニーズがある。だが中国ではアヘン戦争（一八四〇～四二年）の影響や国内の混乱でお茶の生産が順調でない。これはチャンスだ」と、日本茶の海外輸出を思いつく。

一八五三年、慶は出島に滞在するオランダ人商館員に嬉野茶の見本を渡し、欧米などに送ってもらうよう依頼した。

その頃の日本は二カ月前にペリーが来航して大騒ぎ、長崎にはプチャーチン率いるロシア艦隊がやって来て寄港中だった。誰もが右往左往している中で、慶はしっかりと先を見ていたのだ。外国との貿易は全て幕府の管理下にあった時代に、一商人が、しかも女性が貿易を行うなどとは常識を超える発想だった。先見性とグローバルな視野、そして行動力――これが慶の身上だ。

それから三年後の一八五六年に成果が表れる。英国人商人、ウィリアム・オルトが嬉野茶の見本を携えて長崎に到着、十万斤とも十二万斤とも言われるお茶の大量注文を慶のもとに寄せたのだ。

当時の「斤」には数種類の換算単位があり、長崎市の資料によると慶自身の記述には「一斤＝約九百三十グラム」とあるという。それに従って換算すると、オルトの注文は約九十三トンまたは約百十二トンという膨大な量だった。

嬉野茶だけでは到底応じきれない。そこで慶は九州一円のお茶の産地を駆け回り、何とか一万斤（約九・三トン）を集めて米国に送り出した。

ただ、ここで一つ疑問がわく。通説では前述のとおり、オルトの来日は一八五六年だが、長崎開

港は安政五カ国条約締結に基づき一八五九年に行われたものだ。実際、別の資料ではオルトの来日は一八五九年となっている。時期については検証が必要なようだが、いずれにしてもこれが我が国の本格的な日本茶輸出のスタートとなった。

その後もオルトからの注文にこたえるため、慶は九州各地で茶畑の開設や拡大に奔走し、生産を増やしていった。日本茶は米国や欧州で人気の商品となり、輸出は急速に増加していく。この結果、慶は短期間で巨万の富を築いたという。

日本の主要輸出産業に成長
坂本龍馬ら志士を支援も

オルトも、慶と協力して長崎の外国人居留地に製茶工場を建設し、日本茶輸出で財を成した。同じく長崎で活躍したトーマス・グラバーも日本茶の輸出を手がけている。

こうして一八六〇年代には、日本茶は長崎港からの輸出品目の一位となった。静岡の産地からの日本茶輸出も増加し、明治時代になると、日本茶は生糸に次ぐ日本第二の輸出産業に成長した。

慶はその先駆けとなったのだった。日本茶を世界に広めた功労者であり、そのことが今日の日本茶ブームにもつながっていると言える。

そうした慶を慕って、幕末には坂本龍馬や大隈重信、陸奥宗光など若き志士たちが集まり、慶は彼らへの経済的支援を惜しまなかったという。これも一種の先行投資だ。まさに新しい時代を切り開いた女性実業家であった。

詐欺被害に遭い没落
それでも新分野で再チャレンジ

だが明治になると、慶の事業にも陰りが見えてくる。日本茶の輸出は静岡産が大きく伸びたが、九州産の輸出は伸び悩んでいた。そのため慶は新たなビジネスの展開を模索し始めていた。

そんな折の一八七一年、熊本藩士の遠山一也という男が慶を訪ねて来た。熊本産煙草の売買契約をオルト商会と結んだので、保証人になってほしいというのである。慶は遠山を信用し保証人となったのだが、これが実は詐欺だった。

なぜ詐欺と見抜けなかったのだろうか。何か新規事業はないかと焦っていて、つい騙されたようなのだ。被害者だったにもかかわらず訴えられ、翌年、千五百両の支払いを裁判所に命じられた。これをきっかけに大浦屋は没落する。

このため慶の晩年は不遇で、失意のまま一八八四年、五十七歳で亡くなった……と言われていた。だが近年の研究では、新しいビジネスで再起を図っていたとの見方が有力になっている。

遠山事件の決着から三年後の一八七五年、横浜に移住していた慶は政府から官営横浜製鉄所の貸与を受け、経営に参画している（他の実業家との共同事業）。同製鉄所は幕末に幕府が設立し明治政府が引き継いでいたもので、造船向けの機械部品などを生産していた。成長が見込まれる造船機械工業分野に乗り出したのである。

さらに一八八一年には、海軍の軍艦「高雄丸」の払い下げも受けている。同船は明治天皇も乗船したことがあるという格式の高い船だ。当時、国内海運をほぼ独占していた三菱に対抗して海運事業を展開したいとする実業家の依頼を受け、共同で買い取ったのだった。

このように、一度は窮地に陥りながらも、あきらめることなく最後までチャレンジ精神を発揮していたのである。

今日、慶のことは長崎ではよく知られているが、全国的な知名度はそう高くはない。企業経営の観点からも、女性の活躍という点においても、もっと多くの人に知ってほしい人物である。

岡田 晃（おかだ あきら）
一九七二年、慶応義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授。二〇二二年、同特別招聘教授。新刊『徳川幕府の経済政策――その光と影』（PHP新書）。